河南の宣講書『宣講管規』―通俗性の強化―

阿部泰記

一　はじめに

清朝が郷約制度の中で行った聖諭宣講は清末に至って善堂が主催して因果応報説話（案証）が編纂されるようになった。その先駆が湖北潜江の王文選編『宣講集要』十五巻（一八五二）であり、その後、天津の荘跛仙が『宣講拾遺』六巻（一八七二）を編集した。これらの宣講書に続いて宣統二年（一九一〇）に河南洛陽の周景文が編集したのが『宣講管規』六巻[1]である。『宣講管規』は『宣講拾遺』にならって『聖諭六訓』「孝順父母」「尊敬長上」「和睦郷里」「教訓子孫」「各安生理」「勿作非為」に配した「善悪案証」六十六篇を掲載し、それらは「浅語方言」を使用して文字を知らない民衆が理解でき、「歌詞」を朗唱して人心を感動させる歌唱体の案証を編集しており、政府刊行の教科書とともに用いれば社会教育に役立つと評価された。本書の案証は『宣講集要』などの先行する宣講書に取材し、従来の案証より歌唱を多く用い、特に歌唱が人を感動させる力を十分に発揮させることによって民衆教化を図ろうとしたことが伺える。また通俗小説を案証に改編することも試みられた。本稿ではこうした『宣講管規』における通俗性の強化について論じる。

二　刊行の経緯

『宣講管規』は、多くの宣講書と同じく、学校で教育を受けることができない人々の道徳教育のために編纂された。編者である洛陽悔過痴人（周景文）の序文には、人々が『宣講拾遺』六巻（清同治十一年）を朗誦するとみな感涙を流して聴きいったため、歌詞が人を感動させ、俗語が人に理解されることに気がつき、『聖諭六訓』に即して新しい宣講書を編纂したと述べている。

為之取荘跛仙『宣講拾遺』朗誦数過、無不踴躍讙呼、感愧零涕而不能自己者。然後嘆歌詞足以動聴、俚語尽人能解也。如是夫、如是夫。有恐講之久而厭故者、請予仿『聖諭六訓』遺意、再為贅之。

また民国二年（一九一三）の劉凞藜の跋には、政府刊行の教科書と併用すれば、文盲の人々に対する啓蒙教育が普及すると述べている。

得吾友周君『管規』、与「審定書」相輔而行、則教育之所飛走、普而又普。為何如哉。惟是書中為警覚愚夫愚婦痴児乳子計、故多設

因果、往往虚者実之、微者顕之、以求易於針愚訂頑。

本書は冒頭に『聖諭六訓』を記し、各巻には『聖諭六訓』の教訓六条に配して以下のような善悪の案証を掲載している。

巻一「孝順父母」―「大孝格天」「越関尋父」「感親成孝」「棄児存孤」「化婦成孝」「逆子速報」「孝女蔵児」「孝行化民」「一門慈孝」「孝逆巧報」

巻二「尊敬長上」―「殮兄捷元」「仁譲奉兄」「化夫愛弟」「仗義全託」「破産全婚」「競婚孫女」「鬼断家私」「孝友双善」「紫荊重栄」「分産興訟」

巻三「和睦郷里」―「書状息訟」「天臘忍辱」「囲棋遭罵」「変蛇復讐」「雅量感人」「睦鄰済飢」「兄弟争訟」「和睦感人」「蔵金救難」「睦鄰善報」「作善降祥」

巻四「教訓子孫」―「善行格天」「嬌養貽害」「市棺活子」「孀貧励子」「耐貧教子」「嫂育遺姑」「嘉言教女」「賢母誡女」「石洞翰林」「見色不乱」「善教子孫」「作孽惨報」

巻五「各安生理」―「贈嚢巧報」「吃菜状元」「救婦得寿」「神罰訛金」「三還登科」「吉神護身」「窮通有命」「全節得栄」「善悪巧報」「救劫十全」「陰隲換元」「氈笠認親」

巻六「勿作非為」―「質妹娶妹」「冥府顕報」「詐銀掛頭」「昧帖変猪」「黄女改婚」「覆水難収」「割耳全節」「雷打悪嬸」「騙人害己」「打無義郎」「百歳同坊」

目次の後に掲載する宣統三年（一九一一）の許鼎臣の序文によれば、周景文は清末の太平天国の乱など不穏な社会情勢に対処するためにこの宣講書を編纂したのであった。

未幾、吏惰民偸、而粤（広東太平天国）・捻（河南捻党）・回匪（陝西甘粛新疆回族）之禍作、中気不固、海外孽牙、亦於是滋張矣。光緒二十六年（一九〇〇）、……曽幾何日、不善之気積、如厝火累卵、将恐一発動、且不可収拾。而吾友洛陽周君景文維新、則於戢影蜷伏齷齪教授山谷間、更取「六訓」者。仿荘君跛仙之例、出以諺語俚辞、写其情与理与事之始末曲折、暇為父老・女婦・童稚・隷豎誦説、聴者或喜、或泣、或驚、或愧、各若有所棖触上下、不自知其所以然、而不能自己者。

三　伝統案証の改編

『宣講管規』は『宣講拾遺』に倣って『聖諭六訓』に即して六巻本の体裁を取っているが、『宣講拾遺』からは案証を採取しておらず、『宣講集要』[2]など先行する宣講書から採取した案証は以下のように九篇ある。

巻一「棄児存孤」―『宣講集要』巻六「稽山賞貧」

巻二「鬼断家私」―『宣講珠璣』[3]巻一「鬼断家私」、『宣講大全』[4]「鬼断家私」、『緩歩雲梯集』[5]巻一「画裡蔵金」

巻三「変蛇復讐」―『宣講集要』巻八「化蛇報怨」

巻四「嫂育遺孤」―『宣講彙編』巻二「知恩報恩」

巻四「石洞翰林」―『福海無辺』[6]巻三「翰林洞」
巻五「喫菜状元」―『緩歩雲梯集』巻三「苦菜状元」
巻五「救婦得寿」―『聖諭六訓醒世編』[7]巻五「徳孽異報附騙財喪身」
巻五「全節得栄」―『触目警心』[8]巻二「白玉圏」
巻六「覆水難収」―『宣講集要』巻七「崔氏逼嫁」、『宣講大全』「馬前覆水」、『宣講珠璣』巻三「馬前覆水」

今、これらの先行する案証と『宣講管規』の文体を比較してみると、歌唱を重視した文体に改編していることを見ることができる。

1．巻一「棄児存孤」

この案証は鄧春栄と妻楊氏が自分の生んだ二歳の子光後を棄て、弟嫁李氏の生んだ六歳の光前を連れて兵乱を逃れる美談である。光後は常大人に拾われて義子となり常山と改名するが、夢に神から詩によって稽山で貧者に施すよう告げられ、そこで父母と再会する。

『宣講集要』「稽山賞貧」の冒頭は次のように散文体で語り始める。

道光年、甘粛省嵇山下、一人名鄧春栄、妻楊氏。春栄、弟兄二人。楊氏、妯娌和睦。不料弟早亡、弟媳身懐六甲、後生一子名光前。歳半時、弟媳得病、臨終将光前寄託楊氏。

これに対して『宣講管規』「棄児存孤」は冒頭を十言句の歌唱（宣）で表現している。（傍点部分は「稽山賞貧」の文字である。）

道光年、甘粛省、嵇山以下。有姓鄧、二弟兄、過活一家。兄春栄、妻楊氏、賢孝可誇。弟春茂、妻李氏、性情也嘉。他一家、四口人、好聴善話。兄弟和、妯娌睦、各安生涯。這好人、也応該、福寿多加。誰知道、前生裏、没好造化。弟春茂、少年亡、妻懐六甲。生一子、名光前、半歳小娃。他的娘、染重病、湯薬不下。満眼涙、叫「嫂嫂、細聴根芽。妹這病、不久裏、就帰黄沙。最可憐、光前児、那箇小児。六箇月、就離了、親生媽媽。（嫂嫂呀）你念起、弟兄們、恩重情大。把光前、全当你、親生娃娃。你把他、恩養到、成人長大。俺夫妻、在陰曹、感謝恩嘉。」（嫂嫂楊氏道）「楊氏女、聴妹言、珠涙交流。賢妹妹、保養病、不用生愁。……

二つの叙述を比較すると、前者が簡潔であるのに対して、後者は詳細になっており、後者は歌唱形式を取ることによって、臨終に子供を嫂に託す弟嫁の悲しみの感情を豊かに表現し、嫂楊氏が弟嫁を慰める言葉も歌詞を用いて直接に表現することによって感情が込められ、聴衆を感動させる効果を奏している。

『宣講集要』「稽山賞貧」では、常山が実の親の存在を知って嘆き悲しむ言葉（十言二十四句）と、楊氏が光前の病死を悼み哀しむ言葉（十言二十二句）に歌唱を用いてるだけであるが、『宣講管規』「棄児存孤」では、前半部のストーリーや人物の言葉を歌唱によって行っており、李氏が病死して楊氏が扶養し、楊氏が光前を出産して、乱世で光前を棄てて光後を育て、常山が神から稽山で貧者に施すよう告げられるところまでのストーリー（十言八十六句）、後半部の常山が実の親の存在を知って嘆く言葉（十言二十五句）、兵乱が収まって鄧春栄夫妻が帰郷するが、光前が病死して埋葬するストーリー（十言十二句）、楊氏

が光前の病死を悼み哀しむ言葉（十言二十一句）、常山が夫妻の慟哭を見て不思議に思う心情（十言四句）、常山と春栄が父子と認めあい、常山が光前の死を哀しむ言葉（十言十七句）、光前が復活して楊氏の代わりに死んだこと、親孝行のために復活したことを語り、世人に善行を勧める言葉（十言十四句）に歌唱を用いている。

なおこのように人物の言葉のほかにも、ストーリーにも歌唱を用いる案証は、すでに宣講書の先駆である『宣講集要』にも散見する。たとえば『宣講集要』巻二「孝避火災」は冒頭から十言句の歌詞で語り始める。

男婦們、休得要、鬧鬧嚷嚷。我今日、説一個、孝順児郎。論此人、抬轎子、不嫖不蕩。家雖貧、学古人、善事高堂。他哥哥、賦性蠢、不把母養。毎日間、只知在、茶館酒坊。張老三、他的名、可詢可訪。他的家、住在那、三渓場上。

そしてさらにこの後に続く、孝行者の老三が自分は食べず母に食事をさせていたわる言葉や、老三が飢餓で倒れて客をかごから落とすが、老三の孝行に感動した客からもらった祝儀で母と食事をし、老三が就寝前に火事に気づいて町内から表彰されるストーリー、語り手が聴衆に孝行を勧める言葉、これらをすべて歌唱体によって語る。

「請老母、来吃飯、坐在席上。漫漫吃、児今日、又要下郷。母説道、我的児、要往那向。也来吃、走遠処、力方剛強。……」辞了母、打轎子、就把路上。抬至在、湯家坪、餓得心荒。……

このように人物の歌唱だけでなくストーリーまで歌唱で語る案証はこの時期には多くはないが、『宣講管規』はこうした歌唱体の案証を継承したものと考える。

2．巻三「変蛇復讐」

『宣講集要』「化蛇報怨」では、「亳州（安徽）城西門外五里、地名小鎮、一部貢生、其家富豪、子孫強壮。家有悪徒数人、依主人之勢、欺騙鄉鄰」と始まり、部家の騾馬に農作物を荒らされた陳老人が部貢生を恨む言葉（七言二十八句）、部貢生が陳老人に家僕の不躾をわびる言葉（七言六十二句）を歌唱で表現している。

これに対して『宣講管規』「変蛇復讐」では、冒頭を宣「人在世上莫欺人、勿仗富貴圧鄉鄰。若使仗勢結成仇、口不敢言怒在心。……」（七言十四句）で説き始めて主題を明示し、部貢生が二子に教訓を垂れる言葉（十言二十四句）、陳老人が部家の家僕に抗議し、部家の家僕が反論する言葉（十言十三句）、家僕が部貢生に訴えるという陳老人を殴って罵る言葉（十言十六句）、陳老人が臨終に際して棺職人に向かって蛇に変身して部貢生に復讐すると語る言葉（十言十句）、それを聞いた部貢生が家僕の狼藉を知って驚く言葉（十言七句）、部貢生が陳老人に家僕の非礼をわび、陳老人が怒りを解く言葉（十言十七句）、部貢生が家僕を叱る言葉（十言六句）、陳老人が吐き出した小蛇を見て部貢生が驚き家僕に教訓する言葉（十言十六句）、これらをそれぞれ十言句で表現している。

両者を比較すると、『宣講集要』「化蛇報怨」が長篇の歌詞でまとめて人物の言葉を表現するのに対して、『宣講管規』「変蛇復讐」はストー

リーを歌詞で表現することはないが、ストーリーの展開に従って細かく短篇の詩歌を用いて人物の言葉を表現しており、後者の方が人物の感情を歌詞で表現し、物語を豊かにしていると言える。

3．巻四「嫂育遺孤」

『宣講彙編』「知恩報恩」では、冒頭は散文で単刀直入に「宋朝有一廖忠臣、自幼被父母驕養成性、成人不知孝順、専好結交匪類、父母屢戒不聴」とストーリーを説き始め、妻欧陽氏が孝順でない夫廖忠臣を諫める言葉（七言四十二句）、姑が臨終に際して忠臣と欧陽氏に幼女閏娘を託す言葉（七言四十四句）、夫妻が母の死を悼む言葉（七言三十四句）、欧陽氏が小姑閏娘を可愛がるため娘秀女が嫉妬し、欧陽氏が秀女を叱咤する言葉（十言三十句）、閏娘が雷神廟で欧陽氏の復活を祈願する言葉を記載する。

これに対して『宣講管規』「嫂育遺孤」では、冒頭に散文体で、「今世嫁女者、聴説婆家有小姑小叔、就憂愁了。為嫂嫂者、亦深厭悪小姑小叔。……我将這姑嫂甚親一案、講来請聴」と、嫂と小姑小叔との和睦が主題であることを明示し、主人公の嫂欧陽氏が教訓書『女児語』[9]を読んで女子の心得を小姑と娘に教える場面を設定し、姑が臨終に際して嫂に小姑を託す言葉（十言二十六句）、欧陽氏が姑の死を悼む言葉（十言十句）、欧陽氏が小姑閏娘を可愛がるので娘が不平を述べる言葉（十言四句）、欧陽氏が娘を教訓する言葉（十言十四句）、閏娘が隣人に欧陽氏の賢明さを称える言葉（十言十二句）、閏娘が欧陽氏の死を悼む言葉（十言十句）を記載しており、『宣講彙編』「知恩報恩」より多く歌唱の場面を設定している。

4．巻四「石洞翰林」

昔、涪州（四川）の李毓霊の後妻陸氏は残酷な性格で、財物を盗んで実家に送っていたことを前妻の子正江に知られることを恐れて、毓霊に讒言し、正江に罪を帰せる。正江は叔父毓秀から銀四十両を借りて毓霊に返す。毓秀は正江を科挙受験のため上京させるが、途中で盗賊に遭い、安岳県の洞中に住む。そこに王正文の嫁張秀英が姑刁氏に虐待され家を追い出されて来る。正江は秀英を家に送り届けるが、刁氏は子其賢に離縁状を書かせて、秀英を正江に保護させる。正江は科挙に及第して翰林を授かる。

『福海無辺』「翰林洞」は、「従来大器自天生。不受琢磨名不成。……」（七言四句）で表現される主題を散文で説明した後、この案証を語る。そして毓霊が正江が銀四十両を盗んだと誤解して罵る言葉（十言二十二句）、刁氏が張秀英を虐待し罵る言葉（七言三十二句）、秀英が洞内で自分の命運を悲しむ言葉（十言五十六句）、正江が秀英を保護して衆人に身分を語る言葉（七言四十四句）、刁氏が翰林夫人になった秀英を見て後悔する言葉（七言四十句）を歌唱で表現している。

これに対して『宣講管規』「石洞翰林」の歌唱は多く、陸氏が正江を讒言する言葉（七言八句）、正江が深慮して父にわびる言葉（七言八句）、陸氏が正江の婚姻をわざと遅らせる言葉（十言二句）、陸氏が銀四十両を正江が盗んだと讒言する言葉（十言八句）、毓霊が誤解して正江を罵る言葉（十言十六句）、正江が事情を話して毓秀から銀四十両を

借り、毓秀が正江に帰宅せず上京して科挙を受験するよう勧める言葉と、正江が上京する途中で盗賊に遭うストーリー（十言二十二句）、刁氏が秀英を虐待して罵り、正文をも罵る言葉（七言二十句）、秀英が泣きながら岩洞に至り、洞中で拙い運命を嘆く言葉（十言四十四句）、正江が秀英に事情を尋ねて、秀英が泣いて事情を語る言葉（七言十四句）、正江が秀英を家まで送り、刁氏が激しく応酬し、其賢に秀英を離縁させる言葉（七言十八句）、正江が衆人に対して身分を明かす言葉（十言三十句）、衆人が正江に秀英との結婚を勧める言葉（十言六句）、秀英の夢の中で城隍が文廟で正江の状元及第を報告する言葉（十言八句）、秀英が正江に身分を尋ね、秀才だろうと言う（七言八句）、秀英が受験の旅費を借りると言う（十言二句）、陸氏が正江の出世を見て後悔するが悪業によって病死し、秀英が乞食になった刁氏を見て驚くストーリーと、刁氏が悪行を悔いる言葉（七言五十句）を歌唱形式で表現している。

ちなみに陸氏が正江を讒言する言葉は『宣講管規』では以下のごとく歌唱形式に改編されている。

『福海無辺』「翰林洞」	『宣講管規』
夫君呀。你看正江賴務正行	夫君夫君你聴講。可恨児子叫正江。
不以我為母、反叫後婆娘偸去	看他人小心不小。他叫為妻後婆娘。日
錢与物拿去進賭場。……	毎偸錢偸物件。背着你下賭博場。……

5．巻五「喫菜状元」

『緩歩雲梯集』「苦菜状元」では、「救人急難、莫大陰功。……」（四言二十句）で主題を明示し、明正徳二年（一五〇七）、江西吉水県の費翁が文昌帝君に貧窮の原因を尋ね、夢で帝君の金章「世上富貴功名、予賜毋得濫償。……」（六言二十四句）を聞かされて、善行を全うしていないと指摘される。費翁は夫の公金返済のため身売りを強要されて河に身投げする若い婦人の言葉（七言十四句）を聞き、船客が同情しないので、自ら年俸十三両を与えて救う。帰宅して妻に食事を求めるが米が無く、事情を告げると妻も理解して苦菜を勧め、神が「今年吃苦菜、明年産状元」と告げて出世を予言する。

これに対して『宣講管規』「喫菜状元」は、歌唱による表現が突出しており、善行を勧める「世上善事本多端、一生行善行不完。……」（七言六句）から説き始めて、人名を「敍翁」に変え、文昌帝君の「金章」は述べず、直ちに身投げする婦人と敍翁の会話（十言二十六句）に入り、敍翁が同乗の船客に援助を求めるが（十言八句）、冷淡な船客に拒絶され（十言十八句）、年俸十三両を与えて婦人を救い、帰宅して妻に食事を求めると、妻は米が無いと答え（十言十六句）、事情を告げると妻は苦菜を勧める（十言四句）。「喫菜状元」ではさらにこの後、無頼の甥が敍翁の行為を嘲ったため（十言二十四句）、敍翁が反論し（十言三十五句）、隣家の元福が敍翁を尊敬して塾教師として雇い（十言十二句）、甥は殺人を犯して後悔する（十言十九句）場面を述べており、『聖諭六訓』「各安生理」の案証らしく構成している。

6．巻五「救婦得寿」

『聖諭六訓醒世編』「徳孽異報」では、『太上感応篇』を引いて、「太

上曰、『禍福無門、惟人自召。善悪之報、如影随形。』」より説き始め、豚を売って偽金を受け取り入水自殺する婦人を救った徽州の王志仁が災禍を免れ、豚を買って偽金を渡し婦人を自殺に追いやった商人が災禍を受ける案証を述べる。話中に、人相占いの劉術士が王志仁に災禍を受けると警告する言葉（十言二十句）、婦人が王志仁に苦衷を語る言葉（十言二十句）、王志仁が相部屋の商人に婦人を救った話をし、善報悪報を信じない商人をたしなめる言葉（十言三十六句）、報恩に訪れた夫婦と王志仁の会話（十言十六句）を設定している。

これに対して『宣講管規』「救婦得寿」では、「救得一命還一命、救人人救循環同。……」（七言八句）で主題を説き、異なるストーリーを構成し、歌唱による表現を多用している。徽州の王志仁が身投げする婦人を救うが、婦人の夫は信じず、ともに旅館に赴いて礼を言いに来たため誤解が解け、王志仁が災禍を免れるとし、旅館で相部屋になる商人は登場しない。そして途中に、婦人が王志仁に身投げした事情を語る言葉（十言十六句）、王志仁が婦人に銀を与えて慰める言葉（十言十四句）、夫が婦人の話を信じず婦人と口論する場面（十言十一句、十言九句、十言五句）、夫婦が王志仁を尋ねて応酬する言葉（七言十二句、十言十八句、十言十句）、相士が王志仁の無事帰還を見て驚き、王志仁が相士に事情を説明する言葉（十言十四句）を設定しており、歌唱の場面を増設している。

なお『聖諭六訓醒世編』「徳孽異報」では西南官話を用いているが、『宣講管規』「救婦得寿」ではそれらを別の言葉で表現している。「淡泊」は貧乏、「出脱」は殺す、「煞擱」は終わらせるの意味である。

『聖諭六訓醒世編』「徳孽異報」

我丈夫莊農人名喚張左、住在那七里舖家甚淡泊。因短欠地租錢頻来討索。最可嘆貧寒人無可奈何。我家中有口猪情甘出脱。償還了地租錢免受囉唆。我丈夫未在家将猪売妥。不料想受誑騙有口難説。用仮銀買去猪客已走脱。你想想這件事怎様煞擱。……

『宣講管規』「救婦得寿」

我丈夫是農夫為人耕田。累年裏欠課租不能帰還。無奈何餧箇猪仗此還欠。前日裏夫買猪価銀四両。我拿這四両銀売到街前。他一秤変成了四両二錢。這是他操歹心将銀頂換。我把這仮銀両拿回家園。……

7．巻五「全節得栄」

山東済南府撫州の馮開順の娘桂英の許婚沈歩雲を引き取って読書させる。歩雲は桂英と結婚し、家宝の白玉圏を桂英に預ける。だがいとこ方応奎が桂英に恋慕して家僕劉二の奸計を用いて王小二に歩雲の殺害を命じるが、小二が誤って劉二を殺害したため歩雲を誣告し、州守陳太爺は歩雲を死罪と結審する。桂英は投身自殺を図って漁師に救われ、白玉圏を売ると陳状元がそれを見て桂英と認める。陳状元は歩雲であり、撫州の陳太爺に救われて養子になり、状元に及第していた。劉二を殺害した小二は劉二の霊魂が憑依して罪を自供する。

『触目警心』「白玉圏」では、「天眼恢恢在上、疎而不漏毫分。……」（六言四句）の格言で主題を導き、応奎が陳太爺に歩雲を訴える言葉（七言十二句）、歩雲が無実を訴える言葉（七言十句）、桂英が獄中に歩雲を見舞って嘆く言葉（十言二十六句）、歩雲が桂英との別れを告げる

言葉（十言三十六句）、桂英が歩雲に再婚はしないと誓う言葉（十言十句）、歩雲が刑部尚書の叔父羅善に救いを求めた書信の言葉（七言八句）、桂英が歩雲の刑死を聞いて悲しむ言葉（十言十六句）、桂英が応奎との結婚話を聞いて嘆く言葉（十言二十句）、桂英が投身自殺する前に血書した遺言（十言二十六句）、方氏が桂英の死を嘆く言葉（七言五十二句）、桂英が状元を歩雲と認めて泣き出す言葉（十言十八句）、歩雲も悲しんで泣く言葉（十言十六句）、歩雲が羅善に処刑される陳太爺を見て弁明する言葉（七言十八句）を「歌」で表現する。

これに対して『宣講管規』「全節得栄」では、宣「天憑日月人憑心。若無良心怎算人。……」（七言八句）で主題を提示し、開順が婿歩雲を引き取り、二人が喜びあう言葉（十言八句）、家僕が応奎に奸計を授ける言葉（十言七句）、家僕が再度奸計を授ける言葉（十言六句）、応奎が歩雲を訴え、歩雲が弁明する言葉（十言十四句）、桂英が歩雲を見舞って嘆き、歩雲が桂英に別れを告げると、桂英が再婚はしないと誓い、方氏が歩雲に救済策を考えよと提言する言葉（十言十四句、十七句、六句）、桂英が歩雲の刑死を聞いて悲しむ言葉（十言十二句）、桂英が応奎との結婚話を聞いて嘆く言葉（十言四句）、桂英が投身自殺する前に書いた血書（十言十一句）、方氏が桂英の死を知って嘆く言葉（七言十八句）、桂英が状元を歩雲と認めて泣き出し、歩雲も泣く言葉（十言二十六句）、歩雲が羅善に陳太爺の弁護をする言葉（七言十句）、小二に劉二の霊が憑依して罪を自供する言葉（十言六句）を歌唱で表現している。

8．巻六「覆水難収」

『宣講集要』「崔氏逼嫁」では、朱買臣は妻崔氏が不運の星に生まれたため家が焼けて寒窯に住み、薪を切って読書に励んだが、贅沢を好む崔氏は隣人に再婚を相談するが（十言十一句）、隣人に嘲笑され、帰宅した朱買臣にも諭される（十言三句）。買臣は占い師に将来出世すると予言されことを告げるが（十言四句）、崔氏は買臣を罵って離縁を求めたため（十言七句）、買臣も仕方なく離縁状を書き（十言七句）、仲人が来て張石工を金持ちとして紹介し（十言二句）、崔氏は買臣に結納金を渡す（十言六句）。崔氏は石工が死亡して窮迫し、買臣の侍女に傅かれて神に衣装を脱がされる悪夢を見る（十言四句）。崔氏は太守に出世した買臣の前で前夫に売られたと訴え、買臣に覆水を元に返せば許すと言われるが、元に返せず後悔し（十言二十一句）、遂に自害する。

『宣講大全』（あるいは『宣講珠璣』）「馬前覆水」では、買臣は占い師に出世すると予言されるが、衆人は信じず嘲笑し、妻崔氏は買臣が五十歳で出世すると言った占い師の予言を信じず、買臣と口論して（十言十四句、十言十八句、十言十句、十言十二句、十言十句）、離縁を求め、無頼趙耿に嫁ぐが、家産を失って乞食をし、会稽太守に出世した買臣の前で事情を話すが（十言二十句）、太守は前夫の買臣だと告げ（十言四句）、崔氏はわびるが（十言四句）、買臣は覆水盆に返らずと告げ（十言十句）、崔氏は後悔して（七言十六句）、自害する。

これに対して『宣講管規』「覆水難収」では、冒頭に宣「奉勧婦人事丈夫、与他同甘並同苦。……」（七言十二句）で主題を明示する点が大

きく異なる。ストーリーはいささか異なるが、歌唱によって人物の言語を表現する点は先行案証と同じである。

買臣は芝売りをして少年に嘲笑されたため、恥じた妻が買臣に芝売りを戒めて買臣と口論し（十言四句、十言四句、十言二句、十言四句、十言六句、十言十句、十言九句、十言六句、十言六句）、買臣のもとを去ったため、買臣は嘆息する（五言四句）。崔氏は後に会稽太守となった買臣のために道路清掃する夫に食事を運んで買臣と再会し、買臣に再婚を皮肉られ（十言六句）、買臣にわびて側室に迎えてほしいと懇願するが（十言十一句）、買臣は覆水盆に返らずと答え（十言八句）、妻は恥じてその場を去り、買臣は皆の前で崔氏の破廉恥をそしり、崔氏は恥じて自害する（十言八句、十言五句）。

なお朱買臣が妻に意趣返しをしたという伝説は後に生まれたと思われる。『漢書』巻六十四上「朱買臣」伝には、「朱買臣は家が貧しく読書を好み、常に薪を売って生活し、薪を担って読書していた。妻が随行して買臣に謳歌をやめるよう求めたが、買臣はやめず、恥じた妻が離縁を求めた」とあり、妻が隣人から嘲笑されることはない。また『漢書』には「買臣は『私は五十歳で富貴になる。今四十歳余だから少し待て』と言ったが、妻は怒って『あなたは溝で餓死するでしょう』と言ったので離縁した」とあり、買臣が自ら将来を予知していることから、後に占い師が買臣の将来を予言したという伝説が生まれたと思われる。『漢書』ではまた、「妻はその後、再婚先の夫とともに買臣の飢寒を見て食事を与えた。……会稽太守となった買臣は前妻と夫が道路を補修しているのを見て、太守の館の庭園に住まわせたが、一月後に妻は縊死した。買臣は夫に埋葬させ、ほかに恩を受けた者にも恩返しをした」とある。

朱買臣字翁子、吳人也。家貧、好讀書、不治產業、常艾薪樵、賣以給食、擔束薪、行且誦書。其妻亦負戴相隨、數止買臣毋歌嘔道中。買臣愈益疾歌、妻羞之、求去。買臣笑曰、「我年五十當富貴、今已四十餘矣。女苦日久、待我富貴報女功。」妻恚怒曰、「如公等、終餓死溝中耳、何能富貴？」買臣不能留、即聽去。其後、買臣獨行歌道中、負薪墓間。故妻與夫家俱上束冢、見買臣饑寒、呼飯飲之。……會稽聞太守且至、發民除道、縣吏並送迎、車百餘乘。入吳界、見其故妻、妻夫治道。買臣駐車、呼令後車載其夫妻、到太守舍、置園中、給食之。居一月、妻自經死、買臣乞其夫錢、令葬。悉召見故人與飲食諸嘗有恩者、皆報復焉。

四　創作案証の文体

このように『宣講管規』には伝統案証を改編し、人物の言語のみならず、時にはストーリーも歌唱で表現するという特色を持つ案証を新に創出している。この特色は伝統案証のほか、創作案証にも現れている。特に冒頭から「宣」（歌唱）で開始する案証には、巻一「大孝格天」「越関尋父」「棄児存孤」「化婦成孝」「逆子速報」、巻二「仁讓奉兄」「化夫愛弟」「仗義全託」、巻三「天臘忍辱」「変蛇復讐」「兄弟争

訟」、巻四「善行格天」「嬌養貽害」「孀貧励子」「耐貧教子」「賢母誡女」「作孽惨報」、巻五「吃菜状元」、「救婦得寿」、「三還登科」、「吉神護身」、「全節得栄」、巻六「質妹娶妹」「黄女改婚」「覆水難収」などがあり、これらはすべてがストーリーを歌唱で語るわけではないが、人物の歌唱場面に重点を置いている。例を挙げれば以下のごとくである。

1．巻一「逆子速報」

親不孝な趙午が飢饉で逃亡する途中、母親を木に吊し口を土で塞いで殺害しようとするが妻王氏が救う。趙午は虎に食われて命を落とし、その霊魂が妻に憑依して自分が天罰を受けたことを明かす。この案証では冒頭に七言四句の歌唱で主題（孝順父母）を示し、歌唱でストーリーを語っていく。

宣「父母本是一家神、時時恭敬当尽心。若有一時不孝敬、得罪上神災禍深。此話人子如不信、講箇逆子害母親。康熙皇帝掌乾坤、壬癸両年天降祲。西安渭南有一人、姓趙名午真愚蠢。……衆聴説、虎噬人、斉来追趕。虎跑後、都来到、婆媳面前。問死這、他是誰、来由細言。……不多時、趙午的、真魂忽顕。他言説、我趙午、是忤逆男。上天爺、因忤逆、命虎来餐。……

2．巻三「天臘忍辱」

宣「自従世人好剛強、多遭煩悩与禍殃。……」（七言二十二句）によって主題（和睦郷里）を説き始め、ストーリーも十言の宣「江南省、淮安府、中有一人。他姓強、名叫富、謹慎小心。平日裏、在郷間、謙恭和平。衆親族、都称他、忠厚不吝。最軟弱、不惹気、不得罪人。像這様、到可以、不惹事因。……」によって語られる。

淮安の強富は柔和な人格で、元旦に無頼に罵られるがかまわず（十言十五句）、家人はそれに抗議すべきだと主張するが（十言十四句）、忍耐すべきだと反論し（十言十二句）、無頼がますます罵り（十言十句）、家人が忍耐できなくなると、「忍讓歌」を歌って聴かせる（長短句）。これに対して樊猛は家人の諌めを聴かず（十言十四句）、罵った酔っぱらいを殺し投獄されて後悔する（十言十五句）。神は強富の夢に現れて寿命を延ばすと告げる（十言八句）。

3．巻四「作孽惨報」

人を誹謗中傷して平気な施八者という者が娘の教育も失敗し、その夫が賭博で家産を蕩尽し、自分も乞食をして惨死する。宣「昔宋朝、江西省、贛県一人。他姓施、名八者、家富千金。性刻薄、説人短、不信善人。他二弟、施九牧、忠厚存心。屢勧兄、説正話、他不聴信。……」によってストーリーを説き始め、八者が乞食を追放する言葉（七言六句）、下女が八者から給金をもらえず泣く言葉と、衆人が八者を非難する言葉、八者の娘が無教養な振る舞いをし、豪奢な嫁入り家具にも不満を言うが、七牧の娘の嫁入り家具は質素であったというストーリー、八者の娘がそれを見て訳を尋ねる言葉（以上十言六十五句）、衆人が豪奢な嫁入り家具を見て批評し、乞食婆が自分も豪奢な嫁入り家具であったが夫が家産を蕩尽したと告白する言葉（十言三十五句）、八者の娘が舅姑に従わず、舅姑が怒る言葉（十言十三句）など、大部分を歌唱で表現している。

4．巻五「贈囊巧報」

塩商査士謙の娘が雨宿りすると、貧家の娘曹氏が貧家に嫁ぐことを悲しんで泣いている（十言六句）。査氏は嫁入り道具の多少を論じてはいけないと戒めるが（十言十四句）、曹氏が貧窮を悲しんでいると答えたため（十言十一句）、同情して嚢銀二十両を贈ると（十言八句）、曹氏は感激して礼を言う（十言八句）。この後のストーリーは歌唱で表現される。曹氏は姓名を尋ねるまもなく慌ただしく分かれる（「想一想、把恩人、姓名細問。未開口、面前来、轎夫四人。」……）。曹氏の夫はその金を資金にして富豪となり報恩を考える（「他夫妻、日夜間、常想報恩。買田地、必両荘、屋必両所。」……）。曹氏に一子が生まれると、雇った乳母が荷嚢を見つけて自分のものと言ったため、曹氏夫妻は乳母夫婦を拝して、準備した田畑を贈る。末尾は勧善の宣「衆婦女、你們都、細聴我勧。各回家、存好心、広行方便。行善事、善報応、就在眼前」で結ぶ。

五　物語文学の改編

通俗性の強化の一環として、以下のごとくポピュラーな物語文学を案証に改編している。

1．巻一「孝女蔵児」―『初刻拍案驚奇』巻三十八「占家財狠婿妬姪　延親脈孝女蔵児」

元、東平府の員外劉従善の娘婿張郎は財産の独占を図り、姑李氏をそのかして甥引孫を追放させる。娘招姐は張郎の陰謀を知って、懐妊した侍女小梅を東荘に匿い、従善は引孫に墓守をさせて避難させ、清明節に墓参りをした折に李氏に道理を説いて引孫を家に迎えさせる。招姐は小梅母子を家に迎え、従善は財産を娘、甥、子に等しく分与する。物語は『散家財天賜老生児』雑劇に由来する。雑劇では娘の名を引張とし、小説では引姐とする。

『宣講管規』「孝女蔵児」では、張郎が李氏に引孫を讒言する言葉（十言七句）、張郎が招姐に心中を吐露する言葉（十言九句）、招姐が張郎の陰謀を知って侍女小梅に東荘に隠れるよう勧める言葉（十言四十二句）、招姐が張郎・李氏に小梅が逃亡したと欺き、張郎・李氏が喜んで従善に報告し、従善が後継者が無くなったことを嘆いて財産を人々に喜捨すること（十言十四句）、従善が遅れて来た引孫をわざと李氏の前で叱る言葉（十言八句）、従善が皆が四散して後に引孫を慰める言葉（十言十一句）、従善が清明節に引孫が墓参りし張郎が墓参りしないのを李氏に示して、張家の後継がいないことを悲しむ言葉（十言十三句）、従善が李氏に引孫こそが劉氏の後継だと明言する言葉（十言九句）、招姐が小梅母子を示して従善に劉家の後継が誰かを認識させる言葉（十言十八句）、従善が財産を三分する決意を示す言葉（十言五句）を歌唱で表現する。

2．巻二「鬼断家私」―『喩世明言』巻十「滕大尹鬼断家私」

明永楽年間、順天府香河県の太守倪守謙は妻陳氏との間に長子善継があり、側室梅氏との間に善述があったが、善継は善述を守謙の子で

はないと侮辱する。守謙は遺産として梅氏に画軸を分与し、清廉な官吏滕大尹に鑑定させる。

「明朝永楽年間、順天香河県、有箇倪太守、名守謙、配陳氏、家累千金、肥田美宅。生一子、名善継」と、散文体の語りで始まり、善継が倪太守の妾梅氏の子善述を倪太守の子のはずがないと陰口する言葉（十言五句）、倪太守が臨終に際して善継に梅氏母子を託す言葉（十言十六句）、守謙が梅氏に画軸を渡して公正な官吏に解読を依頼せよと遺言する言葉（十言二十句）、梅氏が悲観して泣く言葉（十言十九句）、善継が善述を罵る言葉（十言七句）、滕大尹が画軸を点検する場面（十言二十四句）、滕大尹が一族の前で守謙と話すふりをする言葉（十言九句）、滕大尹が小屋から銀五罈を埋蔵されていると言う言葉（十言二十六句）を歌唱で表現している。

先行する案証に『宣講珠璣』巻一「鬼断家私」、『宣講大全』「鬼断家私」がある。なお『緩歩雲梯集』巻一「画裡蔵金」も内容が同じであるが、地名を貴陽、人名を倪天佑など変更が多く、後出の案証と言える。

3．巻二「紫荊重栄」―『醒世恒言』巻二「三孝廉譲産立高名」

昔、京兆府の田真・田慶・田広兄弟があり、田広の妻季氏がおろかで分家を主張するが、紫荊の木を切って分けようとすると、枯れていたので三兄弟は泣き出して分家をやめ、田広は妻を罵る。竈の神が季氏の実家の嫂に憑依して季氏の命を奪うと言う。

宣「兄弟本是手足情、如何彼此両分清。……」（七言二十句）に始まり、田真が妻に忍耐の重要さを説き、妻が同意する言葉（十言三十句）、田慶が妻に三綱五常を説く言葉（十言二十句）、田慶が妻の道を説く言葉（十言二十三句）、田広の妻が夫に分家を説く言葉（十言十四句）、田広が二兄に分家を求め、二兄が反対する言葉（十言十八句）、田真が紫荊の木の三分を主張する言葉（十言七句）、三兄弟が枯れた紫荊を見て泣く言葉（十言十五句）、田広が妻を罵る言葉（十言六句）、竈の神が嫂に憑依して田広の妻を罵る言葉（十言六句）を歌唱で表現している。

4．巻六「騙人害己」―『喩世明言』巻二「陳御史巧勘金釵鈿」

江西贛州府石城県の魯学曽は顧僉事の娘阿秀と婚約していたが、父の死後貧窮したため、顧僉事は婚約破棄を考える。阿秀は従わず、密かに学曽に結納の金を贈ろうとする。学曽はいとこ梁尚賢に衣服を借りに来るが、尚賢は事情を聞いて学曽になりすまして阿秀と夫婦のちぎりを結ぶ。御史陳濂は行商に扮して事件を調査し、尚賢の犯行の証拠を集め、阿秀の霊魂は尚賢の妻田氏に憑依して尚賢の犯行を証言する。阿秀は学曽の夢に現れて、来世の夫婦を約束する。

5．巻六「打無義郎」―『喩世明言』巻二十七「金玉奴棒打薄情郎」

宋、紹興年間、杭州の乞食頭の金老大には娘玉奴がおり、乞食頭を金癩子に譲って、鄰翁の紹介で莫秀才を婿にする。だが金癩子が婚礼に招かれなかったため暴れて、乞食頭である身分が知られる。莫稽は無為軍司戸に就任するが、結婚を後悔して宋石江で船から玉奴を河に突き落とす。玉奴は莫稽の上司である淮西転運使許徳厚に救われて養

女となり、夫人が玉奴に事情を話して和睦させる。

六　結論

清末の聖諭宣講では卑近な因果応報説話（案証）を人物が歌唱によって心情を吐露し（宣）、語り手が通俗的な言葉で講説した（講）。それ故に宣講と言えば聖諭を宣講するという意味より案証を宣講するという意味に変移した。『宣講管規』六巻は『宣講集要』よりも遅れて編集されており、さらに通俗性を増して、案証の冒頭から十言句の歌唱で語り始めて主題を明示し、人物の言葉のみならず、ストーリーまでも歌唱形式で表現して感動を聴衆に伝達する方式を用いるようになった。もともと通俗的な聖諭宣講は四川を中心とした地域で行われており、『宣講集要』十五巻を先駆とし、四川の案証が最も多く収録されているし、四川の方言である西南官話で語られているが、その後、各地に伝播したと思われ、北方では天津で『宣講拾遺』が編集され、洛陽で『宣講管規』が編集された。北方の宣講書には西南官話の特徴は顕れていないが、通俗的な性格を増して民衆により親しまれる歌唱形式が展開していったものと考えられる。また通俗性を強化するためにポピュラーな物語文学を案証の形式に改編することも行われていったと思われる。

注

(1) 河南省図書館蔵。早稲田大学風陵文庫に翻刻本を蔵する。民国二十四年、謙記商務印刷所代印。経理陳希黄の附誌に、「此書原板存洛陽。協和万民国二十四年九月承李毅成先生嘱為翻印。係其封翁彌留之際所遺嘱也。……」と言う。

(2) 十五巻首一巻。咸豊二年（一八五二）序刊本、存四冊（巻首、巻一、巻三、巻八、巻九、巻十、巻十一、巻十三、巻十五）、国立中央図書館台湾分館蔵。なお光緒刊本の巻五、巻十四にはそれ以後の案証も掲載している。

(3) 四巻。光緒三十四年（一九〇八）経元書室復刊。

(4) 一巻、六十二篇。光緒三十四年（一九〇八）序。民国二十六年（一九四七）上海鴻文書局編印。

(5) 四巻。同治二年（一八六三）復刊。

(6) 四巻。二十六篇。民国二年石印。

(7) 六巻。宣統元年（一九〇九）石印、営口〔県〕成文厚蔵版。光緒戊申（三十四年、一九〇八）の楊占春芳圃の序文によれば、原板は奉天省錦州城西虹螺県〔蜆〕鎮の堅善講堂にあり、主管の楊子僑が編集したものであるが、原板が摩耗したので営口の宣講堂で数案を加えて再販したと言う。

(8) 五巻。光緒十九年（一八九三）、沙市（湖北）善成堂蔵版。

(9) 明呂得勝『女小児語』、清陳宏謀『教女遺規』中巻収録。

（山口大学大学院東アジア研究科教授）